

高瀬文志郎*

1956年秋、いまからちょうど10年前のことである。大脇・石田五・安田・北村・松波の諸氏と小生が、鍋山先生のお宅へおしかけて、かねてからの計画を相談した。当時は20世紀後半に入って活動を開始したパロマーの200吋、48吋シュミットをはじめ世界のいくつかの大望遠鏡が、急速にその成果を発表しはじめた頃で、この年にはパロマーの写真星図が完成出版されている。恒星・星団・星雲などの観測とその統計的・理論的解析による恒星系の構造や進化の議論——すなわち恒星天文学の分野は大きな進展の機運にあった。関係論文も相ついで提出されるので、それらをこなす上からも、従来から東大や東京天文台にあったコロキウムほかに、ぜひ恒星天文関係の勉強会を作りたい、というのが相談の内容であった。ビールをごちそうになったせいもあって、大変熱っぽい雰囲気集まりであったことを懐しく思い出す。

SAMはこうして誕生した。その第一回の会合は、1957年の1月24日に、東大の旧麻布教室で約10人が集まって開かれたのである。鈴木敏、清水（当時小金井の地理調査所におられた）、進士の諸氏の顔も見えた。SAMという名はStellar Astronomy関係のMeetingというのをつづめたもので、この時に何となくそう決った。以来その語呂のよいせい、意味を知る知らぬに拘らず、人々からサム、サムと気軽に呼ばれつづけて現在に至っている。

以上がSAMの歴史の第一頁であるが、二頁目につづくのは、京大・東北大などの関係者の参加である。発足から3年目の1960年には、「恒星の空間分布と運動」というテーマで、SAMメンバーを中心とした総合研究グループが、文部省科学研究費の交付を受けることになった。これを機会に、京大の清水氏を中心とする京都・大阪・和歌山のグループと、東北の菊池氏がSAMに加われ、また東京でも、天体物理学の青木・堀両氏はこの前後から恒星系力学にも関心を示して、以来SAMの常連として今日に至っている。この総合研究は61、62年度と引続き3年間研究費をもらい、さらに1966年度からはふたたび「銀河系の研究」というテーマで研究費の交付を受けることになった。こうしてSAMは研究資金の裏付けをもつことができ、より活発に動くことができるようになった。その活動の一つが、SAM夏の勉強会である。

1961年にその第1回が新潟県池の平で開催された。

* 東大理

ここの公務員や教員宿舎を4日間借切って、総合研究のテーマに則り、各種の恒星や星団についてみんなが分担して、それらの分布・運動・物理的特性についての観測および統計資料の検討を行った。初めての試みであったが、泊りこみのために時間が十分に使え、ひるよるを問わず討論ができるし、懇親も深まって好評であったので、以後毎夏この形式での勉強会がならわしとなっている。第2回と第3回は同じく池の平、第4回と第5回は長野県の菅平、1966年の第6回は八王子のセミナーハウスでやった。第2回のプログラムは、恒星系力学理論のおさらいと、galaxiesの観測資料のまとめの二本立てであった。第3回以後の勉強会の内容については、それぞれの集録が出ているので、それらを参照されたいが、第4、5、6の三回は、「Galaxyおよびgalaxiesの構造と進化」という総合テーマを設定して行ったものである。また第4回頃からは、岡山の望遠鏡によるSAMメンバーの観測が実施され始め、恒星系・星団・galaxiesなどの観測者が情報交換を行なう場としても、夏の勉強会が利用されるようになった。第5回・第6回には、天文学将来計画について、SAMの立場からの検討をし、意見をまとめて天文学研連委に提出した。夏の勉強会の参加者は回を逐うごとに増しており、しかもこれはSAMの常連だけでなく、天体物理、宇宙論、電波、位置天文学関係の人々の積極的な参加がふえて、勉強会が多彩になり、議論も多角化して誠によるこぼしいことである。

一方夏の勉強会以外のSAMは、東京で月二回、京都で月一回程度、それぞれ輪番でテキストを読み、論文を紹介し、オリジナルのアイデアを発表して検討をしあうなどの、ふつうの研究会である。上にSAM常連と書いたのは、こういうふだんの会に顔を出している人のつもりであるが、東京で15~6人、京都で12~3人といったところであろうか。ただしいろいろな頻度で時々顔を出す人々が少なくないことも、SAMの好ましい特長であろう。

SAMはその意味からしても、あくまで勉強会なのであって固定したグループをいうのではない。恒星天文学と、それに関連する分野での議論をしようと思う人が、いつでも自由に参加できる場でなければならない。夏の勉強会では大体このことが実現されているように思われるが、今後ともなお一そう、多方面の人々の積極的な参加がいただければ幸である。